

HOW TO グループ学習

グループ学習が求めるもの・ グループ学習で求めるもの

楠橋佐利（大阪・豊能町立吉川小学校）

1. はじめに

小学校では、体育という教科が、それほど大切にされていないと感じるのは私だけでしょうか？ 子どもの「できる」・「できない」がはっきりし、それが見えてしまうことで、子ども一人ひとりの能力が固定的に見られがちな体育。そこをできるだけ見せないようにしたい、という思いが「元気に動き回っていればいい。」というような「発散体育」にとどめてしまいがちです。それが、結果として他の教科よりも教材研究などの位置づけを落としてしまうのかも知れません。しかし反面、学級崩壊が起こった際に、体育実践を中核として荒れを乗り切ったという話も聞かれます。これは、もちろん体育実践だけが全てではなく、その先生の学級運営の方法や技術、自身のひたむきさ等によるところが大きいのでしょう。しかし、結果としてそのような状況が生まれていることもあるようです。このように、「体育学習と学級づくりは密接なつながりがある。」とも言われることがあります。それはなぜでしょうか。

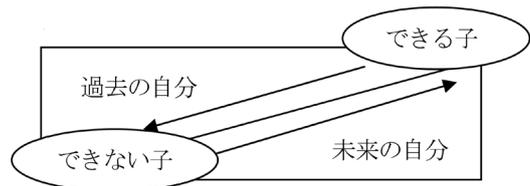
2. 技術を媒介として繋がる体育

体育という教科が、「学級づくり」に影響を与えたとしたら、それは一言で言うと「仲間同士の感情が交流される」からであるとい

えます。しかもそれは、ただの感情（情緒的な感情）の交流ではなく、スポーツの中にある「文化」としての「技術」を媒介として感情が交流されるという点に特別な理由があるのです。

俗に言う「運動オンチ」は、その人の生まれてからの環境や経験によるものが大きいといえます。できるポイントさえ見つけることができ、そのポイントに従って習熟していけば解決していくと考えています。

「できる子は、できない子にとっての未来の自分。できない子はできる子にとっての過去の自分。」であると考えます。すなわち「できない」から「できる」の傾斜があるとしたら、みんなその線上にいるという考え方です。



このような考え方の上に立てば、できない子はだめという見方はなくなります。「技術を媒介にした感情の交流」の意義がここにあります。また、できない子の「できる」に関わることで、集団も個も成長します。それは、個々の能力観や集団観に迫っていくからです。

3. 体育学習で重要なグループ学習

(1) みんなが「わかりできる」体育

子どもたちの「できない」を「できる」に変化させていくためには、「技術」を獲得していくための科学的な根拠に基づいた「できるようになるための系統」が必要になります。それが「スモールステップ」と呼ばれるものであったり「原理・原則」、「コツ」であったりするのでありますが、それがあただけでは十分とは言えません。初めから一定できる子ども、「なぜできるのか」をわかっていないことが多いのです。これが、ボール運動であれば、「なぜ、ちゃんと動けないのか？」というチームメイトへのとらえ方になってしまいます。しかし、そのできない原因が分かればチームは強くなるし、器械運動であれば、できるようになった友だちの喜ぶ顔を見ることができます。次の「できない」に出会った時の意欲にもつながるでしょう。また、「できない」子にとっても（気づきに近い場合でも）「わかる」は存在します。時には、それがみんなのヒントになったりもするものです。ですから「みんながわかり、できる」は、スポーツを教材にする体育にとって非常に重要なものになります。そこで、「みんなが分かり、できる」ようになるためには、グループが必要になる訳です。

グループは、単に「励まし合う小集団」ではありません。ボールゲームなら触球数を調べ、「なぜこの子にはボールが回ってこないのだろう」と考え、シュート調査や心電図（山本雅行執筆P●参照）で一人一人の動きを調べるなど、子どもの「わかる」に寄り添いながら「できる」を目指していきます。そして、だれもがシュートする喜びを味わえることを

目指します。また、その目標を達成するための手立てが系統的に示されるようにします。このような「手立てを系統的に示す」学習は、多くの実践をもとに系統性研究から生まれてきました。系統性研究は、体育の授業を通して「うまくなっていくことを全ての子どもたちに保障しよう」「できない子どもたちを切り捨てない」という思想のもとに生まれてきたものです。その中で学校体育研究同志会は、科学的根拠の上に立った指導法を生んできました。（成果は「ドル平」という泳ぎに代表されます）そして、この系統性研究を進めていくうちに、子どもたち同士が関わり合って共にうまくなっていく過程が重要視されるようになってきました。

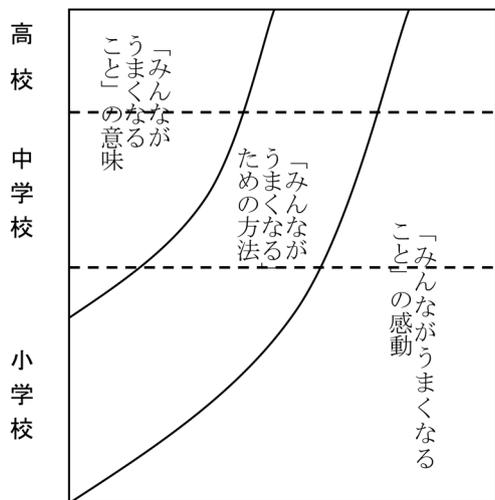
(2) 「みんながうまくなること」を教える

体育で教えることは、水泳であるなら、単に泳げない子どもたちが泳げるようになるとか、ボール運動であるならボール操作がうまくなるといったような「ただただできる」ことのみにとどまりません。様々な技能水準、興味、関心をもっている集団（異質集団）に対して、「みんながうまくなること」を教えていくのです。出原氏（元愛知学泉大）は、この『『みんながうまくなること』を教える体育』は、3つの系から成り立っていると言っています。

- ①みんながうまくなることの「感動」を教えること。
- ②みんながうまくなることの技術的・集団的「方法」を教えること。
- ③みんながうまくなることが、スポーツの発展や社会の進歩とどのように関わっているかという「意味」を教えること。

このような中身を教えるために、私たちはグループ学習を行っています。「みんながう

まくなること」を教えるためには「うまくなること」(技術)を媒介として、友だち同士、仲間同士のかかわり合いやつながりをつくっていかねばなりません。それにはグループ学習が欠かせないからです。



「みんながうまくなること」を教える体育

4. わたしたちの考えるグループ学習

(1) グループ学習の目指すもの

少し長い引用になりますが、出原氏は、著書「体育の授業方法論」の中で次のように述べています。

技術学習の上で、自分とは異なる個性と関わることは、習熟と認識を深めていく上で決定的に重要である。自分の出来具合と友だちの出来具合との交流の中で、技術認識を媒介にして友だちと結びつくのである。この関係の進化の中で人間感情をも交流する。はじめは助け合う仲間や励まし合う仲間であったものが、技術認識の深化につれて、分かり合う仲間、学びあう仲間へと発展していく。技

術認識と集団認識が共に高まっていくのである。『わかる』こと＝技術認識を土台にしながら、子どもは自らの集団を変革していく。集団として、学習内容に立ち向かっていき、それを我がものにしていく過程で、集団としての方法をも身につけていく。

このようにグループ学習は、方法レベルにとどまることなく、体育の授業における目的や内容を問題としているのです。重複するかもしれませんが、グループ学習は「身体運動」や「技能習熟」を体育の授業の中核として進めていくのではなく、「技術認識」や「わかる」を中核にすることで、学習する集団の質的な発展をねらっているのです。

(2) グループ学習の具体的な姿

私たちが考えるグループ学習の理想的かつ具体的な姿とは次のようなものです。

①オリエンテーション

グループ学習では、1つの単元にある程度時間をかけます。そのために単元の見通しや全体像をはじめに子どもたちに把握させておく必要があります。ここではアンケートをとったり、ビデオを使ったりしてこれから始まる学習への期待と意欲を持たせることが重要です。

②学習の中心にグループをおく

単元全体の学習の見通しをもとに、各グループで授業1時間ごとの計画を立てさせます。はじめから1時間全ての計画を立てさせるわけではありませんが、1部分でも各グループで考えた計画を実践に移し、自分たちで総括することを行います。「計画—実践—総括」というサイクルを質的に高めていくことに教師は指導の力点を置くのです。

③中間総括（中間オリエンテーション）

ここでは、グループごとに行った学習への軌道修正が行われます。自分たちの到達目標を再確認し、その時点での課題を探ります。その中で新たな目標の提示をする場合もあります。ここで教師は、子どもたちが前半の学習を総括する中から、これからの課題を見出すような指導が必要になります。

④発表会・記録会・リーグ戦など

それまでの学習の成果を子どもたち自身がお互いに確認し合う時間です。教師は、できるだけ成果が見えるよう、確認できるように引き出し、交流させる指導をします。

⑤まとめ

単元のしめくりとなり、新たな単元への出発点ともなります。教師は、子どもたち自身に、自分たちがどのような力がつけたのかを具体的に自覚させることが必要です。グループごとに成果をまとめさせ、発表させたり、文章としてまとめたり（文集や資料集など）する活動を行います。

これらを行うために教師は、

- ・「わかる」で結びつくために、教育内容の準備や教材解釈のための教材研究。その上に立って、子どもたちのつまづきや失敗を想定し（引き起こさせる場合も）、それを乗り越えさせるための見通しや具体的方策。
- ・みんながうまくなるために必要な力、集団的・組織的力量を高めるような指導。が必要になってきます。

（以上「体育の授業方法論」より一部引用）

（3）グループ学習でつける学力

上記のようなグループ学習で、私たちは、「みんながうまくなることを自分たちで作りに出せるような集団的・組織的方法を伴った学

力」をつけることを目的としています。

また、グループ学習は、「技術を習得したり、認識したりするための集団的な取り組みの経験とそのやり方を習得する」ために行われるともいえます。これが子どもたちの学力として身につくのです。しかし、そのつき方には段階があり、中瀬古氏（神戸親和女子大）は、次のように述べています。

①グループ学習の学習スタイルそのものを学ぶ。

②『できる』ことや『わかる』こと、『みんながうまくなること』を共通目標にしておく。

③「できる」「わかる」「みんながうまくなる」が具体的な方法を伴って実現していく。

④学習集団が「みんながうまくなること」の実現を課題化できるようになる。

このような段階を経て、子どもたちは「みんながうまくなることを自分たちで集団的・組織的に作り出す」という学力をつけていくのではないかと思われれます。ですから教師は、上記のような段階を高めていく指導を行う必要があります。

5. おわりに

体育学習の成果が学級づくりにつながってくると言うのであれば、それは学習集団の質的な発展が、結果として学級集団のトーンづくりに貢献するからでしょう。できる、できないがよく見え、子どもの「能力観」と直接関わる体育という教科だからこそクラスの集団づくりに影響するのは当然といえます。体育が学級づくりを目的としているのではないとはいえ、感情の交流があるからこそ深くお互いのことを知っていくグループ学習が不可欠なのです。